一橋大学ア式蹴球部

Vol. 3

続 戦記

酉松会

戦歴一覧

大正 10 年度（1921）～ 令和 6 年度（2024）

草創期			昭和 21 年 (1946)	1 部	5 位：1 勝 4 敗
大正 10 年 (1921)	**初試合** vs 早稲田高等学院		昭和 22 年 (1947)	1 部	最下位：0 勝 5 敗
専門学校蹴球リーグ 東高師・東大・早高・商大			昭和 23 年 (1948)	2 部	最下位：0 勝 5 敗
大正 11 年 (1922)	最下位：0 勝 3 敗		昭和 24 年 (1949)	3 部	優勝：7 勝 0 敗
大正 12 年 (1923)	～ 関東大震災 ～		昭和 25 年 (1950)	2 部	4 位：2 勝 3 敗
ア式蹴球東京カレッジリーグ			昭和 26 年 (1951)	2 部	4 or 5 位：3 勝 2 敗 1 分
大正 13 年 (1924)	2 部	5 位：1 勝 4 敗	昭和 27 年 (1952)	2 部	4 位：2 勝 3 敗 1 分
大正 14 年 (1925)	2 部	5 位：2 勝 3 敗	昭和 28 年 (1953)	2 部	5 位：1 勝 5 敗
大正 15 年 (1926)	2 部	3 位：2 勝 1 敗 2 分	昭和 29 年 (1954)	2 部	5 位：2 勝 4 敗
昭和 2 年 (1927)	2 部	4 位：2 勝 2 敗 1 分	昭和 30 年 (1955)	2 部	6 位：1 勝 4 敗 1 分
昭和 3 年 (1928)	2 部	4 位：2 勝 2 敗 1 分	昭和 31 年 (1956)	2 部	6 位：1 勝 4 敗 2 分
昭和 4 年 (1929)	2 部	4 位：1 勝 1 敗 3 分	昭和 32 年 (1957)	2 部	5 位：2 勝 3 敗 2 分
昭和 5 年 (1930)	2 部	最下位：勝敗不詳	昭和 33 年 (1958)	2 部	4 位：3 勝 3 敗 1 分
昭和 6 年 (1931)	3 部	最下位：0 勝 4 敗 1 分	昭和 34 年 (1959)	2 部	4 位：2 勝 3 敗 2 分
昭和 7 年 (1932)	4 部	優勝：3 勝 0 敗 2 分	昭和 35 年 (1960)	2 部	6 位：1 勝 4 敗 2 分
昭和 8 年 (1933)	3 部	優勝：5 勝 0 敗	昭和 36 年 (1961)	2 部	7 位：0 勝 4 敗 3 分
昭和 9 年 (1934)	2 部	優勝：5 勝 0 敗	昭和 37 年 (1962)	2 部	3 位：3 勝 4 敗
関東大学サッカーリーグ Ⅰ期			昭和 38 年 (1963)	2 部	6 位：2 勝 4 敗 1 分
昭和 10 年 (1935)	1 部	5 位：1 勝 4 敗	昭和 39 年 (1964)	2 部	7 位：2 勝 5 敗
昭和 11 年 (1936)	1 部	5 位：2 勝 3 敗	昭和 40 年 (1965)	2 部	6 位：2 勝 4 敗 1 分
昭和 12 年 (1937)	1 部	最下位：0 勝 5 敗	昭和 41 年 (1966)	2 部	最下位：1 勝 5 敗 1 分
昭和 13 年 (1938)	2 部	優勝：5 勝 0 敗	昭和 42 年 (1967)	3 部	3 位：3 勝 2 敗 2 分
昭和 14 年 (1939)	1 部	5 位：1 勝 2 敗 2 分	**東京都大学サッカーリーグ Ⅰ期**		
昭和 15 年 (1940)	1 部	2 位：3 勝 2 敗	昭和 43 年 (1968)	1 部	2 位：6 勝 2 敗 1 分
昭和 16 年 (1941)	1 部	4 位：1 勝 2 敗 2 分	昭和 44 年 (1969)	1 部	5 位：4 勝 4 敗 1 分
昭和 17 年 (1942)	1 部	最下位：1 勝 3 敗 1 分	昭和 45 年 (1970)	1 部	5 位：3 勝 3 敗 3 分
昭和 18 年 (1943)	2 部	優勝：3 勝 0 敗	昭和 46 年 (1971)	1 部	4 位：3 勝 2 敗 2 分
昭和 19 年 (1944)	～ 戦時休止 ～		昭和 47 年 (1972)	1 部	7 位：2 勝 5 敗
昭和 20 年 (1945)	～ 戦時休止 ～		昭和 48 年 (1973)	1 部	4 位：4 勝 3 敗 1 分

関東大学サッカーリーグ Ⅱ 期		
昭和 49 年 (1974)	2 部	7 位：3 勝 4 敗
昭和 50 年 (1975)	2 部	最下位：0 勝 5 敗 2 分
昭和 51 年 (1976)	2 部	7 位：1 勝 5 敗 1 分
東京都大学サッカーリーグ Ⅱ 期		
昭和 52 年 (1977)	1 部	7 位：2 勝 5 敗
昭和 53 年 (1978)	2 部	優勝：6 勝 0 敗 1 分
昭和 54 年 (1979)	1 部	6 位：2 勝 3 敗 2 分
昭和 55 年 (1980)	1 部	5 位：0 勝 1 敗 6 分
昭和 56 年 (1981)	1 部	最下位：0 勝 7 敗
昭和 57 年 (1982)	2 部	4 位：2 勝 1 敗 4 分
昭和 58 年 (1983)	2 部	最下位：0 勝 4 敗 3 分
昭和 59 年 (1984)	3 部 A	優勝：6 勝 1 敗
昭和 60 年 (1985)	2 部	5 位：3 勝 3 敗 1 分
昭和 61 年 (1986)	2 部	6 位：2 勝 5 敗
昭和 62 年 (1987)	2 部	3 位：2 勝 2 敗 3 分
昭和 63 年 (1988)	2 部	5 位：2 勝 3 敗 2 分
平成 1 年 (1989)	2 部	最下位：0 勝 5 敗 2 分
平成 2 年 (1990)	3 部 A	優勝：5 勝 1 敗 1 分
平成 3 年 (1991)	3 部 A	5 位：1 勝 2 敗 4 分
平成 4 年 (1992)	3 部 A	2 位：4 勝 1 敗 2 分
平成 5 年 (1993)	2 部	7 位：1 勝 4 敗 2 分
平成 6 年 (1994)	3 部 B	優勝：5 勝 0 敗 2 分
平成 7 年 (1995)	2 部	5 位：3 勝 3 敗 1 分
平成 8 年 (1996)	2 部	5 位：3 勝 4 敗
平成 9 年 (1997)	2 部	最下位：0 勝 4 敗 3 分
平成 10 年 (1998)	3 部 A	優勝：6 勝 1 敗
平成 12 年 (2000)	3 部 B	2 位：5 勝 1 敗
平成 13 年 (2001)	3 部 B	5 位：2 勝 3 敗 2 分
平成 14 年 (2002)	3 部 B	7 位：1 勝 4 敗 2 分
平成 15 年 (2003)	4 部 C	優勝：6 勝 0 敗 1 分
平成 16 年 (2004)	3 部 B	4 位：3 勝 2 敗 2 分
平成 17 年 (2005)	3 部 B	優勝：6 勝 0 敗 1 分
平成 18 年 (2006)	2 部	4 位：5 勝 2 敗 2 分
平成 19 年 (2007)	2 部	9 位：1 勝 5 敗 3 分
平成 20 年 (2008)	3 部	3 位：4 勝 1 敗 3 分
平成 21 年 (2009)	3 部	3 位：7 勝 2 敗
平成 22 年 (2010)	3 部	3 位：7 勝 2 敗
平成 23 年 (2011)	3 部	2 位：6 勝 2 敗 1 分
平成 24 年 (2012)	2 部	7 位：4 勝 5 敗
平成 25 年 (2013)	2 部	4 位：8 勝 4 敗 6 分
平成 26 年 (2014)	2 部	8 位：6 勝11敗 1 分
平成 27 年 (2015)	2 部	5 位：9 勝 8 敗 1 分
平成 28 年 (2016)	2 部	2 位：11勝 4 敗 3 分
平成 29 年 (2017)	1 部	9 位：3 勝12敗 3 分
平成 30 年 (2018)	2 部	5 位：7 勝 7 敗 4 分
令和 1 年 (2019)	2 部	4 位：9 勝 7 敗 2 分
令和 2 年 (2020)	2 部	6 位：5 勝 6 敗 2 分
令和 3 年 (2021)	2 部	3 位：9 勝 5 敗 4 分
令和 4 年 (2022)	2 部	8 位：9 勝 8 敗 3 分
東京・神奈川リーグ Ⅰ 期		
令和 5 年 (2023)	2 部	優勝：17 勝 1 分 4 敗
令和 6 年 (2024)	1 部	最下位：2 勝17敗 3 分
令和 7 年 (2025)	2 部	

一橋 大学

東京都大学サッカーリーグ Ⅱ期

令和３年度 （2021）

★主将：北西真之（4）/ GM：七條 拓（4）/ 監督：戸田和幸（元日本代表）
★最高学年：阿部海斗 / 河原岳大 / 北畠大暉 / 櫛田 潤 / 佐川友規 / 戸田知輝
戸塚陵介 / 内藤昂平 / 藤井勇磨 / 森下 昂 / 山口健介
★MGR：八乙女ゆい（4）

山口・戸塚・戸田・藤井・内藤・櫛田・河原・八乙女
佐川・阿部・七条・北西・森下・北畠

【試合メンバー】

FW 七条（4）・森下（4）・鈴木春（3）
HB 阿部（4）・佐川（4）・戸田（4）・佐藤由（3）・小林尚（2）・鈴木元（2）・渡邉直（2）
BK 河原（4）・北西（4）・戸塚（4）・皆川（3）・北河（2）・木村航（2）・山崎惇（1）
GK 北畠（4）・堀（3）

【戦績】 東京２部：３位 ９勝５敗４分 ＊大学名は左から前期リーグの対戦順

	都立大	成城	武蔵	桜美林	理科大	上智	玉川大	創価	東工大
前期	●0-4	○1-0	○2-0	△0-0	△1-1	●0-2	●1-2	○6-1	○2-1
後期	○1-0	△0-0	●2-3	○4-0	○2-0	●1-3	○3-2	△0-0	○2-0

【最終順位】1 上智 2 玉川大 3 一橋 4 武蔵 5 都立大 6 理科大 7 創価 8 桜美林
9 東工大 10 成城

【記事】・・ 北西真之（主将）

創部 100 周年となる今季、我々は 1 部昇格を目標に設定した。
先輩方のご支援による人工芝のホームグラウンドがある。トレーニングメニューは
元日本代表の戸田監督が考案したもので、練習後には的確なフィードバックもいただける。
こんなに　贅沢な環境を用意していただいたら 1 部昇格を目指すのも当然だろう。チーム内に
異論があるわけもなく、私も“今年昇格しないで、いつ出来るんだよ ”と本気で思っていた。

シーズンインしてからは、コロナの規制によりチーム全体の練習が許されず、
ひたすらフィジカルトレーニングに取り組んだ。その成果もあってか、開幕前の対外試合では
関東リーグに所属するチームに善戦。これ以上ない準備ができたはずだった。そして迎えた
東京都立大学との開幕戦。確かな手応えと大きな期待とは裏腹に 0 - 4 で完敗。悲惨だった。
泣いてしまう後輩もいたほどだ。私たちがどれほど脆いチームなのかを突きつけられ、チーム
全体に不安が蔓延していた。しかし、次の試合は待ってくれない。立ち上がらなければならない。

その後、戸田監督に引っ張られ、尻を叩いてもらって
何とか勝ち点を積み重ねることができたが、ギリギリだった。いつ決壊してもおかしくなかった。
そして上智戦で惨敗し、ついに 1 部昇格という看板を下げるようお願いされた。私たちはまだ
その目標を目指すレベルになく、足元からチームの成長を考えるべきではないかと提案された。
この時、悔しいという気持ち以上に“俺ら情けないな”という感情が生まれたことを覚えている。
試合では責任を負うことを恐れ、逃げてきた。自分のプレーで負けたくないから安全なプレーを
選択してしまった。練習でも弱さを乗り越えようとはせず与えられたメニューをただこなすだけ。
情けないとしか言いようがない。

それ以降は、弱さとひたすら向き合い続ける日々だった。
良くなったかと思えば、すぐに元に戻るというようなことを繰り返しながら、我々は少しずつ
変わっていった。後期の上智戦では 1 - 3 で敗れはしたものの、自分たちのスタイルを貫き通せた。
2 - 3 で敗れた武蔵戦も、失点しても崩れず、何度も追いついた。そして最終節の理科大戦では、
3 位を自力で決めることができた。開幕戦の弱々しい姿とはちょっと違う我々が、そこにはいた。

このように 1 部昇格とまではいかなかったものの、
価値のある 1 年を過ごすことができたと感じている。最終節後のチームメイトの顔から、
皆もそうなんだろうなと思う。我々がア式で得たものは、かけがえのないものである。
この 4 年間たくさん支えられ、応援していただいた方々への感謝の言葉で締めたいと思う。
本当にありがとうございました。

令和４年度　(2022)

★主将：加藤紘基（4）/ GM：皆川 開（4）
★最高学年：遠藤慎之介 / 長田 陸 / 海谷俊輔 / 佐藤由都 / 東明建志 / 澁谷亮佑 /
鈴木春平 / 福嶋謙志 / 堀 伊吹 / 宮津佑介 / 山本怜央
★MGR：岩元陽菜（4）/ 七海 碧（4）

皆川・堀・福嶋・東明・加藤・山本・澁谷・海谷
七海・宮津・佐藤・遠藤・鈴木・長田・岩元

【試合メンバー】
FW 長田（4）・工藤（3）・鈴木元（3）・桑島（2）
HB 鈴木春（4）・皆川（4）・佐藤由（4）・渡邉直（3）・木村航（3）・小林尚（3）・平賀（1）
BK 加藤（4）・東明（4）・海谷（4）・北河（3）・小松（3）・山崎惇（2）・外池（2）・羽根（2）
GK 堀（4）・杉田（3）

【戦績】　東京２部：８位　９勝３分８敗　　＊大学名は左から前期リーグの対戦順

	武蔵	都留文	東工大	成城	大東文化	東大	理科大	日大文理	ICU	都立大
前期	○3-2	○2-1	○2-1	○4-2	●0-1	●1-2	●0-3	●0-2	○3-0	●1-2
後期	△0-0	○7-0	○2-1	△2-2	●1-2	○1-0	●1-2	●1-3	○3-0	△0-0

【最終順位】１ 大東文化　２ 東大　３ 成城大　４ 理科大　５ 武蔵大　６ 日大文理　７ 都立大
８ 一橋　９ ＩＣＵ　10 東工大　11 都留文

【記事】・・ 加藤紘基（主将）

今期の活動は、激動の１年であったと感じる。
まずは開幕までのプレシーズン。先輩方の引退と同時に、２年間指導してくださった戸田さんが退任されることが告げられ、自分たちが最高学年になる時点で学生のみでの活動を知っていたのは自分たちだけとなった。オフ期間から過去の自分たちの知見や２年間で戸田さんから得たものを元に同期や後輩と話し合い、新しい組織体制や運営について考えるところから始め、試行錯誤を続けながらアップデートし、競技面の方でもトレーニングや練習試合を経るごとに自分たちが前進する感覚を持ちながら充実したプレシーズンを送ることができたと感じていた。

そして期待を胸に迎えた開幕戦。
相手は武蔵大学。自分たちよりも格上の相手に序盤から得点を重ね、結果は３-２で勝利。
最高のスタートを切り、続く３試合も勝利し、開幕４連勝。うち２試合はロスタイムで決勝弾。
うまくいきすぎていた。好調のムードが漂いどこか油断していたのかもしれない。５試合目の相手はリーグ首位の大東文化大学。相手をリスペクトしながらも自分たちの持てる力を発揮して、全力でぶつかるもセットプレー１本に泣き０-１の敗戦。今度は逆にうまくいかない試合が続き、気がつけば４連敗。得点はなかなか奪えず失点だけが増えていく。今までの自分たちの積み重ねが否定されてきたかと思うほど苦しい期間で、主将としての不甲斐なさに悩まされる日々が続いた。

そんな憂さを晴らしてくれたのは夏の終わりの商東戦だった。
３年ぶりに有観客での試合が駒澤第二球技場で開催され、相手は東大。試合前の整列で観客席を見ると相手よりもはるかに多い人数の一橋の観客席。４年間で一番燃える試合だった。
何よりチームとして最後まで粘り強く思考を止めずに戦う姿を、会場に足を運んでくださった方に見せられたこと、そして勝利する姿を見せられたことがうれしかった。しかし夏の中断期間が明けた後は順位の近い相手との直接対決で勝ちきれない日々。個人的にも最後の１か月は腰を骨折してプレイできず、戻れたのは最後の試合の後半 15 分。最終順位は８位に終わった。

振り返ると悔しさや後悔ばかりを思い出してしまう。
４連勝している時にもっと引き締めていればな、負けが続いた時もっと軌道修正できることがあったんじゃないか、あの試合の自分のプレイはもっとうまくやれた等々、挙げればきりがない。
ただそれ以上に感じたことは、やはり支えてくれる人々への感謝だ。自分たちがシーズンを通して成長できたのは、OB や保護者の皆さんの努力によって完成したリーグ最高峰の人工芝グラウンドで練習することができたおかげであり、公式戦においても多くの人の声援が自分たちの力になることを商東戦で身をもって体感することができた。事実、有観客での試合では無敗という記録が残っている。この自分が体感したようなサポートを今度は自分が現役部員にしていくことが後輩たちのためであり、自分がア式に残した後悔を唯一晴らす方法だと思う。

関東大学サッカー 東京・神奈川リーグ Ⅰ期

令和５年度 （2023）

★主将：渡邉直樹（4）/ 学生監督：近岡 頌（4）

★最高学年：相原昌典 / 大石光誠 / 狩野琳太朗 / 北河耕太 / 木下涼太 / 木村航大 / 工藤稜也 / 小林尚史 / 駒形拓海 / 小松怜平 / 清水一貴 / 杉田 周 / 鈴木元貴 / 長島直紀 / 野口泰人 / 藤村俊輔 / 溝口幸太郎 / 向井友紀 / 山下 諒 / 米凛太郎 / 六角勇人

★MGR：清水真衣（4）

藤村・向井・六角・米・山下・小林尚・北河・駒形・狩野・小松・杉田・近岡
木下・工藤・相原・木村航・長島・渡邉直・大石・鈴木元・野口・溝口・清水一・清水真

【試合メンバー】

FW 相原（4）・工藤（4）・鈴木元（4）・笠置（3）・桑島（3）・齊藤（3）・八巻（2）・西野（2）・三浦（2）

HB 小林尚（4）・向井（4）・渡邉直（4）・五十嵐（3）・森谷（3）・平賀（2）・堤（2）・赤金（2）

BK 大石（4）・北河（4）・木村航（4）・小松（4）・野口（4）・六角（4）・加久保（3）・外池（3）・塚本（3）・山崎惇（3）・安部（2）・篠田（2）

GK 杉田（4）

【記事】・・ 渡邉直樹（主将）

今季から関東リーグの３部が創設され、従来の東京都リーグは神奈川県リーグと合併し、「関東大学サッカー 東京・神奈川リーグ」となった。それに伴い、昨季東京２部に所属していた上位５チームは東京・神奈川１部に昇格し、一橋は同リーグ２部に残留した。重要な局面の試合で勝点を積み上げることができず、まだまだ競技者としてのメンタリティーが劣っていたことが昇格と残留を分けた大きな要素であると考える。

《令和４年度シーズン 東京２部 最終順位表》

順位	大学	勝点	勝	分	負	得点	失点	差
1	大東文化	57	19	0	1	56	11	45
2	東 大	43	13	4	3	43	14	29
3	成 城	37	12	1	7	60	38	22
4	理科大	34	11	1	8	29	29	0
5	武 蔵	33	10	3	7	42	21	21
6	日大文理	33	11	0	9	32	38	-6
7	都立大	32	9	5	6	44	26	18
8	一 橋	30	9	3	8	34	26	8
9	ICU	11	3	2	15	16	63	-47
10	東工大	8	2	2	16	18	53	-35
11	都留文	1	0	1	19	15	70	-55

⬆️ １部昇格

⬇️ ２部残留

《令和５年度シーズン 東京・神奈川２部 所属チーム》

大 学	昨年度	大 学	昨年度
◆日本大学 文理学部	東京２部 ６位	◆工学院大学	東京３部 １位
◆東京都立大学	東京２部 ７位	◆芝浦工業大学	東京３部 ２位
◆一橋大学	東京２部 ８位	◆日本大学 生物資源科学部	東京３部 ３位
◆国際基督教大学	東京２部 ９位	◆松蔭大学	神奈川 ４位
◆東京工業大学	東京２部10位	◆神奈川工科大学	神奈川 ５位
◆都留文科大学	東京２部11位	◆防衛大学校	神奈川 ６位

【戦績】 東京・神奈川 ２部：優勝 17 勝１分４敗 → １部 昇格

	工学院	神工大	都留文	ICU	都立大	芝工大	防衛大	松蔭大	東工大	日大文理	日大生資
前期	●１-２	●１-２	○３-２	○２-０	○３-１	○２-１	○６-２	○２-０	○５-１	○５-０	○５-０
後期	△１-１	●２-３	○７-１	○４-０	○４-２	○２-０	●２-３	○３-０	○１-０	○２-１	○４-０

＊大学名は左から対戦順

【最終順位】１ 一橋 ２ 日大文理 ３ 都立大 ４ 工学院 ５ 日大生資 ６ 神工大 ７ 芝工大
８ 東工大 ９ ＩＣＵ 10 松蔭大 11 防衛大 12 都留文

今季リーグ戦で特に印象に残っているのが、開幕からの２連敗。
直前のアミノバイタルカップ２回戦で１部リーグの帝京大学に勝ち、良い結果を残せていただけに非常に辛いものだった。こういう時に出てくる敗因としては「油断」というものがある。たった２文字で片付けてしまえる魔法の言葉だ。決して油断をしていたわけではないし、いや気づかない所で油断していたのか未だによくわからないが「細部にこだわることができなかった」というのが大きな理由だったと振り返って思う。勝った時には誰もあまり見ようとしないが、負けた時には誰もが嫌でも自分やチームの行動を振り返り反省点を探す。そういう意味で負けというものは、勝ち点はついてこないが大きな価値があると言える。と言いつつも、リーグ優勝と１部昇格を達成した代の主将になれたことは本当に嬉しく思う。

コロナの世代ということもあり、環境的にも大きく変わった代だった。
普通であれば経験できていたこともできなかったと思う。試合で応援できるようになったのは３年の終わり頃からで、OBOG や保護者が試合に見に来られるようになったのは４年生の頃からだった。寄付周りに関しても、初めて実際にお会いして話をすることができたのは 10 月直前の引退間近だった。コロナ禍時代の酉松会新聞の記事を見てみると当時の部員の思いが詰まっていて状況がよく分かる。その中に１部リーグ昇格を達成することができなかった最後の１年間の活動は意味がなかったと綴られているものがあった。最高学年時に昇格を経験できた自分が言うのは説得力がないかもしれないが、例え昇格できなかったとしても自分たちの活動はとても意義のあるものだったし、実りあるものであったと胸を張って言えると思う。

現在のア式蹴球部は、単に競技活動だけでなく
ファンクラブの運営やサッカースクールなど様々な事業活動も行っている。入部したばかりの１年生ですら部のために活躍できるチャンスがある（酉松会新聞 17 号「事業活動から」参照）。
今の自分たちの体制にあまり納得していない OB の方や１部リーグ昇格や２部リーグ優勝という目標を明確に対外的に押し出していないことを不思議がる OB の方がいることは分かっているし、そのこと自体を否定したいとも思わない。だけど今のようにリーグ戦以外でも部員の活躍の場があるというのは、部員が様々なフェーズや時々の状況で、何かしらの目標を持って活動できるということであると思う。

ア式蹴球部は活動的にも部員の心情や価値観的にも、
数年や十数年といった短いスパンで大きく変わっていく。今このように書いていることも未来の部員にとっては少し風変わりで偏った意見になっているかもしれない。全ての代においてア式蹴球部の核になっている伝統的な部分は残しつつも、その周りにある物事は、その時々の活動や部員によって変化し続けるというのがいいのではないかと思う。今後自分が OB としてア式蹴球部の活動を見聞きすることになった時、自分の想像を超えるような面白くワクワクさせる取り組みを、サッカーでもサッカー以外の領域でもするような組織になっていると嬉しく思う。

令和６年度　(2024)

★主将：山﨑淳樹（4）/ 川合 楽：（ヘッドコーチ 法政大学）

★最高学年：五十嵐日向大 / 大石俊輔 / 加久保陽太 / 笠置悠真 / 桑島 晴 / 齊藤泰治 / 鈴村哲平 / 塚本悟大 / 外池陽丸 / 西田優希/ 羽根洸至 / 原 智也 / 堀内誠大 / 森谷高太 / 薮田尚希 / 渡辺志音

堀内・鈴村・桑島・塚本・羽根・外池・齊藤・西田・原　　薮田（右上丸枠）

笠置・大石・加久保・山﨑・五十嵐・森谷・渡辺・川合

【試合メンバー】

FW　笠置（4）・桑島（4）・齊藤泰（4）・八巻（3）・西野（3）・三浦（3）・藤原凌（2）

HB　五十嵐（4）・大石（4）・西田（4）・森谷（4）・平賀（3）・堤（3）・赤金（3）・伊崎（1）

BK　加久保（4）・外池（4）・塚本（4）・羽根（4）・山崎惇（4）・安部（3）・篠田（3）

GK　岡田（3）・藤原拓（2）

【戦績】東京・神奈川リーグ１部：最下位　２勝３分 17 敗　→　２部 降格

対戦順→	朝 鮮	学 芸	玉 川	上 智	成 蹊	帝 京	日大文理	武 蔵	東 大	学習院	大東文化
前期	●3-6	●0-5	●2-3	●1-2	●0-4	●0-8	●0-1	●2-4	●0-1	●1-5	●1-5
後期	●2-6	△1-1	△0-0	△0-0	○3-1	●0-3	○1-0	●1-5	●0-5	●0-8	●2-5

【最終順位】1 帝 京　2 学 芸　3 大東文化　4 武 蔵　5 成 蹊　6 学習院　7 朝 鮮
8 日大文理　9 玉 川　10 東 大　11 上 智　12 一 橋

【記事】・・ 山﨑惇樹（主将）

〝シーズン開幕までの積み上げの無さ〟と〝基礎を疎かにしてしまったこと〟
これが降格してしまった大きな要因である。開幕戦から１部リーグとの大きな壁を感じた。それはフィジカル面だけでなく、テクニック面も、走力面も、多くの面で自分たちを上回るチームを相手につながりを強固にして、チームとしての総合力で相手を上回るサッカーを目指した。４バックで守り切れないから５バックにし DF 背後の広大なスペースを消すために引いて守るという選択をとった。その消極的な選択が相手チームの一方的な展開を加速させ、敗北を重ねる結果を招いてしまった。徐々に積極的に前線からプレッシャーをかけ、２点取られても３点取って勝つサッカーへとシフトしていったが、それでも勝ち点３をつかみ取ることはできなかった。

チーム戦術は、あくまでも個人の能力の上に成り立つものである。
戸田さんの時から〝つながりを絶やすな〟ということはよく言われてきたし、前年度監督の近岡さんもそれを重視していたと思う。それがア式のカラーだと思うし、それがあったからこれまで何度も格上の相手に勝利してきた。だから、それを否定する気は毛頭ない。だが、それが効果を発揮するのはあくまでも個の能力差が埋められる程度の時だけだ。それに気づくことができなかったというより、目を背けていた。失点した時に〝自分が目の前の FW を止められなかったからだ〟と、責任を感じることができなかった。〝人数がそろっていなかったからカバーが間に合わなかった〟と、自分の弱さから目を背けてしまっていた。FW にしてもそうだったと思う。
〝自分が単独でも点を取っていたら〟ではなく、〝チームとしてもっとチャンスを作っていれば、サポートがもっとあれば〟に逃げていた。ようやく基礎に目を向け、個々の能力向上を目指した練習を増やしてもらったり、自主練習でそれぞれの課題に取り組むようになった結果、少しずつ成果が現れ始めたが、あまりにも遅すぎた。

「基礎の重要性」など、あらゆる分野、あらゆるレベルで必ず言われる当たり前のことだ。
しかし精神的に追い込まれると、そんな当たり前のことに気づけなくなる。自分の弱さを認めたくなくて当たり前のことから目を背けてしまう。そうやって当たり前のことを当たり前にやっている人と大きな差ができてしまう。社会人になると学生時代よりも失敗が許されなくなり、「基礎の重要性」が一層増していくだろう。だからこそ、この教訓を４年間の濃密なア式人生の中で得た、かけがえのない経験の１つとして、大切にしていきたい。

令和７年度シーズン 東京・神奈川リーグ２部

大 学	昨年度	大 学	昨年度
◆ 上智大学	１部 11 位	◆ 芝浦工業大学	２部 ７位
◆ 一橋大学	１部 12 位	◆ 日大生物資源科学部	２部 ８位
◆ 神奈川工科大学	２部 ４位	◆ 東京工業大学	２部 ９位
◆ 成城大学	２部 ５位	◆ 工学院大学	２部 10 位
◆ 創価大学	２部 ６位	◆ 東京都立大学	２部 11 位

西松会 会員名簿

令４卒
阿部 海斗
河原 岳大
北西 真之
北畠 大暉
櫛田　潤
佐川 友規
七條　拓
戸田 知輝
戸塚 陵介
内藤 昂平
中田 裕之
藤井 勇磨
森下　昂
山口 健介
井上 絢菜
八乙女 ゆい

令５卒
遠藤 慎之介
長田　陸
加藤 紘基
佐藤 由都
東明 建志
澁谷 亮佑
鈴木 春平
福嶋 謙志
堀　伊吹
皆川　開
宮津 佑介
山本 怜央
岩本 陽菜
七海　碧

令６卒
相原 昌典
大石 光誠
狩野 琳太朗
北河 耕太
木下 涼太
木村 航大
工藤 稜也
小林 尚史
駒形 拓海
小松 怜平
清水 一貴
杉田　周
鈴木 元貴
近岡　頌
長島 直紀
野口 泰人
藤村 俊輔
溝口 幸太郎
向井 友紀
六角 勇人
山下　諒
米 凛太朗
渡邉 直樹
清水 真衣

令７卒
五十嵐 日向大
大石 俊輔
加久保 陽太
笠置 悠真
桑島　晴
齊藤 泰治
鈴村 哲平
塚本 悟大
外池 陽丸
西田 優希
羽根 洸至
原 智也
堀内 誠大
森谷 高太
薮田 尚希
山﨑 惇樹
渡辺 志音

注）実際の卒年と一致しない場合あり
注）女子マネージャーは現役当時の名前で表記

Hitotsubashi University Association Football Club

100th

1921-2021